

2. 取組を進めるに当たり困難であった事例

E. 学習・研究環境の改善

①TA・RA制度による修学上の支援

取組を進めるに当たり困難であった事例について

E. 学習・研究環境の改善

①TA・RA制度による修学上の支援

《人社系》

●広島大学教育学研究科教育人間科学専攻

「Ed. D型大学院プログラムの開発と実践」の事例

(具体的に何を実施し、何が困難であったのか)

教育実習をおこなう博士課程後期学生を本プログラムにおいてはTAとして任用した。彼らは、15回のうちの一部とはいえ、担当した部分については単独、あるいはチームで授業を任される授業者となり、それによって手当の支給を受ける。その点に注目すれば、本プログラムのTAは、従来のTA制度とは性質を異にする画期的な試みであった。しかし、講義や演習の一部を単発的に担当するプラクティカムでは、ティーチング能力を身につけるといっても、彼らに対する経済的支援という点でも、おのずと限界があったことは否めない。理想を追求すれば、米国におけるTAと同じく、シラバスの作成にはじまり、実際の授業や成績評価にいたるまで、ひとつの講義全体を担うほどの役割を果たすことも考えられるが、わが国の実態には適さないであろう。

(苦労したこと、困難であったこと、具体的な要因は何だったのか、それにより実施内容がどのような影響を受けていたのか)

Ph.Dの取得を至上の課題とされ、研究業績によって就職が左右される博士課程後期学生にとってみれば、研究者としての能力に重きを置く一方で、大学教員としての能力は、優先順位の低いものとならざるを得ない。ティーチング能力が必須であるとの自覚はありながら、そのトレーニングは後回しにするほかないという矛盾を抱えた、わが国の教育学分野の大学院生をめぐる状況が、本プログラムの実施を通じて改めて浮き彫りになった。

(どのように対応し、どのような結果が得られたのか、また、その結果が望ましいものではなかった場合、あらかじめどのように対応していれば適切であったのか、どうすればより良い結果を導くことができたのか)

上述のような課題は、TAに対する財政的支援や社会的地位の確立といった、TAをめぐる制度上の支援が全学レベルで図られ、博士課程は将来の大学教員の養成機能も併せもつことについて、全教員の間で理解が共有されることによってはじめて克服されるであろう。

2. 取組を進めるに当たり困難であった事例

E. 学習・研究環境の改善

①TA・RA 制度による修学上の支援

〈理工農系〉

●北陸先端科学技術大学院大学マテリアルサイエンス研究科

「ナノマテリアル研究リーダーの組織的育成」の事例

(具体的に何を実施し、何が困難であったのか)

全般的にいえることだが、教員及び学生の参加意識に温度差が感じられた。特に協業チュータリングなどのTAは応募者が少なく、積極的な学生のみ参加が目立った。

(苦労したこと、困難であったことの詳細な要因は何だったのか、それにより実施内容がどのような影響を受けていたのか)

大学院ということで、研究が中心にあることは仕方がないという大きな要因。

(どのように対応し、どのような結果が得られたのか、また、その結果が望ましいものではなかった場合、あらかじめどのように対応していれば適切であったのか、どうすればより良い結果を導くことができたのか)

大学院で研究以外のリーダーシップを学ぶ等の意識をあらかじめ高めておく必要があったのではないかと。